The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	孝行譚における「乳」
Author(s)	佐野, 大介
Citation	中国研究集刊. 2014, 58, p. 33-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58709
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　闕号（総五十八号）平成二十六年六月　三三―四六頁

孝行譚における「乳」

佐野大介

はじめに

儒家的思惟において、孝は「孝、道之美、百行之本也」（『白虎通』攷黜）などとされ、諸徳の中でも特別の地位を占める。ために、儒教文化圏では、孝を奨励し、時代を通じて数多くの孝行譚が撰されてきた。それらの中には、多種多様なモチーフが見られるが、「乳」（乳房・母乳）もその一つである。「実親―娘」間や「舅姑―嫁」間の孝行に関する記述、つまり女性からの孝行譚には、ときおり「乳房」「母乳」の登場するものが見られる。

「乳」の第一の機能は子の哺育にあり、「乳」は母及び母性の象徴とされる。よって、母から子への関係性を描いた慈愛譚に「乳」が現れるのは至極当然といえるが、孝行譚に「乳」モチーフが登場するのは聊か意外にも思える。

なぜ女子から親（実親・社会的親）への関係性を描く孝行譚に「乳」が用いられるのであろうか。

本稿では、孝行譚に現れた「乳」の記述の検討を通じて、孝行譚における「乳」モチーフ使用の理由や、その意義・機能について探ってみたい。

一、「乳」の母性象徴

『広韻』引く『蒼頡篇』に、「母」の字形を説いて、「其中有両点、象人乳形」（『広韻』韻上声四十五厚、引『蒼頡篇』）とするように、「乳」は母を象徴する。

また、嬰児はその生存を、母親の乳房・母乳に代表される哺育に完全に依存する存在であることから、

若し皇子有れば母自ら乳養し、保妾医巫に委ね、以て飛燕の禍を致す無し（若有皇子母自乳養、無委保妾医巫、以致飛燕之禍）。（『後漢書』列伝五三、李固伝）（傍点引用者以下同）

など、子を哺育することを象徴する。また、そこから、

母の乳を飲むを計るに、各おの八斛四斗有り。母の恩を討論するに、昊天極まり罔し（計飲母乳、各有八斛四斗。討論母恩、昊天罔極）。（『父母恩重経』）（注1）

など、母の恩もまた象徴する。

さらにその象徴性は、授乳が単に母子を繋ぐ行為であるのみに止まらず、母子の繋がりより発生する感応を示すものとなってゆく。

朱脩之は、劉義隆の司徒従事中郎なり。滑台を守るに、安頡之を囲む。其の母家に在り、乳汁忽ち出づ。母号慟して家人に告げて曰く、我年老い復た乳汁有るの時に非ざるに、今忽ち此の如し。児必ず歿せん、と。果して其の日を以て頡の擒うる所と為る（朱脩之者、劉義隆司徒従事中郎。守滑台、安頡囲之。其母在家、乳汁忽出。母号慟告家人曰、我年老非復有乳汁之時、今忽如此。児必歿矣。果以其日為頡所擒）。（『魏書』巻四三、朱脩之伝）（注2）

これは、「老母の乳房から母乳が出、母はそれを息子の死の証だと語る。果たして息子はその日に敵の虜となっていた」という話で、一種の奇跡譚だが、ここで老いた母が母乳を出したことは、息子の難に感応したことを示している。

また、梁代の仏教系類書『経律異相』には、釈迦が母摩耶夫人と再会した際、母乳の感応を用いて親子であることを証明するという話を載す。

摩耶の乳汁自ら流る。若し是れ悉達たれば、当に汁をして其の口に入らしむべし。両の乳汁出で遠く仏の口に入る。摩耶歓悦し、普く地震動す（摩耶乳汁自流。若是悉達、当令汁入其口。両乳汁出遠入仏口。摩耶歓悦、普地震動）。（『経律異相』第七巻）（注3）

釈迦の母親である摩耶夫人が母乳を大勢に向けて絞ったところ、子である釈迦の口に収まり、これが親子の証明となったという話である。

「母乳の示す感応によって母子関係を証明する」というモチーフは、『法苑珠林』などにも見え、

夫人語りて言えらく、汝慎て手を挙げて父母に向う莫かれ。我は是れ汝が母なり、と。千子問いて言えらく、何を以てか験と為さん、と。母、子に答えて言えらく、我若し乳を按めば一乳に五百岐有らん。各おの汝が口に入れば、是れ汝の母なり。若し当に爾らざれば、是れ汝が母に非ず、と。即時両手に乳を按む。一乳の中五百岐あり、千子が口中に入る（夫人語言、汝慎莫挙手向父母。我是汝母。千子問言、何以為験。母答子言、我若按乳一乳有五百岐。各入汝口、是汝之母。若当不爾、非是汝母。即時両手按乳。一乳之中五百岐、入千子口中）。（『法苑珠林』巻第二八、神異篇第二〇、胎孕部第四）(注4)

とある。こちらは「両乳房から噴き出した母乳が各々五百条に別れ、千人の息子の口に入った」という話である。どちらも、母乳が母子感応の証拠として機能するものといえよう。

二、孝行譚・慈愛譚に見える「乳」

二―一、母乳を与える話

前章で示したように、「乳」が哺育即ち母の「慈」を表すのはごく当たり前のことだといえようが、意外なことにこの「乳」関連のモチーフは、孝を描いた文脈においてもまま見出すことができる。例えば「二十四孝」に見える唐夫人の故事がその代表的なものである。

王母長孫夫人、年高く歯無し。祖母唐夫人、姑に事えて至孝。毎旦櫛縰して階下に**笄**拜し、即ち堂に升りて其の姑に乳す。長孫夫人粒食せざれど、数年して康寧なり（王母長孫夫人、年高無歯。祖母唐夫人、事姑至孝。毎旦櫛縰**笄**拜於階下、即升堂乳其姑。長孫夫人不粒食、数年而康寧）。（『二十四孝』唐夫人）

嫁である唐夫人が、年老いて歯の無くなった姑に己の母乳を飲ませたという孝行譚である。ここでは、本来「母」の象徴として「慈」を表すはずの「乳」が、「孝」

を示すモチーフとして用いられているといえる。

この母乳を親（舅姑）に与えるというモチーフは、他地域においても見出すことができる。先ず、本朝の昔話「孫の生き埋め」を『日本昔話通観』による粗筋によって示す。

①老父が仮病をつかい、三人の息子に、乳飲み子を生き埋めにして嫁の乳を飲ませてくれ、と頼むと、兄二人はことわる。②末息子が、子はまた生めるが親は二度と拝めない、と承諾すると、老乳は孫を埋める場所を指示する。③末息子がそこを掘ると、老父の埋めた黄金が現われ、末息子夫妻はその金で孝養をつくす。（「孫の生き埋め」）(注5)

また、説経『石山記』第三段は、

［梗概］とよ春・若のまへ夫婦と、とよ春の母と夫婦の子とよ若との四人で旅をしているが、飢えに苦しめられる。若のまへは自らの乳を姑に与えようとするが、姑は孫に与えるよう諭す。姑に与える乳を確保するため、夫婦は我が子とよ若を池に沈めて殺す。（『石山記』）(注6)

というものである。「孫の生き埋め」『石山記』共に、「舅姑に対する嫁の授乳」「親のための子殺し」というモチーフを含んでおり、「二十四孝」の唐夫人譚と郭巨譚とを合成したような構成となっている。なお『石山記』には、「かう〳〵ふかき心さし、もろこしのたうふしんにも、まさりたるけん女かな、それのみならす、くわつきよといふ者、老たる母をはこくみかね、……」(注7)とあり、当該モチーフが唐夫人譚・郭巨譚を踏まえたものであることがわかる。

また、西洋絵画のテーマとして知られる「ローマ人の慈愛」（「ローマの慈愛」・「キモンとペロ」）と呼ばれる話も同様に親に母乳を飲ませる話である。

地位の低い平民の女が、罪を犯して牢に閉じ込められた母親との面会を許可されたが、食物をひそかに持ち込まないように、面会前にはいつも看守に調べられていた。子供を産んだばかりの女は、やがて自分の乳房から出る栄養物を母親に与えているところを見つかった。この娘の愛情のすばらしさは、母親の釈放によって報いられ、母娘両人に扶養料が与えられた。（『乳房論』引ローマ故事）(注8)

なお、ここで挙げた故事では乳を与えられる対象は母親とされているが、同著に、「ローマの「親孝行」話は娘が牢獄の母を乳で養った物語だった。ルネッサンス期には、母親が父親に入れ替わり、父娘の近親相姦的な色彩が加わった」(注9)とあるように、この故事をテーマとする絵画や彫刻などでは、ほぼ全て父親として描かれている。

物語以外にも、本朝の『孝義録』には、

母の年やう〳〵に老しれて、おさな子のことくなりしかは、くさ〳〵の玩ひ物をそなへて其心を慰め、時によりてハ乳をのミたしなといふに、妻ハ四十にあまれるまて一度も子をうめる事なきに、己か乳房をふくませて其心にまかせしか、或ハ吸或ハ齧て乳房も爛れし事なとありしか、いさゝかもいとへる色なく、かゝる老衰のさまにてハ余命のたのミ少なきをなけき、夫婦共にひそかに涙おとしとなん(『孝義録』巻五〇、大隈国、孝行者、後藤宇右衛門妻)(注10)

という記事が収録されている。こちらは史実の記録であるため、子を産まぬ女性に母乳が出るなどの奇跡は起こらないが、「親に母乳を与える」行為が単なる物語上の虚構ではなく、一部で実際に行なわれていたことが分かる。

これらの例から、各文化において、本来「慈」を表す「授乳」が、孝を表すモチーフとして用いられる様子が確認できよう。

二―二、乳房を割いて与える話

漢土の故事にはまた、「母子離別にあたり子に乳房を切り取って与える」というモチーフが存在する。

劉明達、天性大孝なり。妻と共に母に奉ず。時歳大いに荒れ、車を推し母を載せ、河陽に逞(ゆ)く。路に在りて子、母の食を侵す。遂に其の子を売る。妻遂に一乳を割きて其の子に与う。相い与に其の孝を成す(劉明達、天性大孝。共妻奉母。時歳大荒、推車載母、逞河陽。在路子侵母食。遂売其子。妻遂割一乳与其子。相与成其孝)。(『孝行録』明達売子)

これは、食糧不足の際、明達夫妻は夫の母の食糧を確保するため子を売り、その際に妻が乳房を切って子に与えたという故事である(注11)。これは、乳房が母体から独立し、それのみで「哺育」の象徴として扱われている例だ

といえる(注12)。この故事全体のテーマは孝行だが、ここでの「乳房切除」は、子に対する慈を示すモチーフである。

また、『唐書』にも同様のモチーフが収められている。

李孝女は、名は妙法、瀛州博野の人なり。安祿山の乱に劫を被り它州に徙る。父の亡するを聞き、間道奔喪せんと欲す。一子をば去るに忍びず、一乳を割きて留め以て行く（李孝女者、名妙法、瀛州博野人。安祿山乱被劫徙它州。聞父亡、欲間道奔喪。一子不忍去、割一乳留以行）。（『唐書』巻二〇五、列女伝）

これらは、「慈」を表す行為として、母が子に哺育の象徴である乳房を切断・供与する例であるが、孝行譚においても、「乳房切除」モチーフが見られることがある。

李孝婦、臨武の人、名は中姑、江西の桂廷鳳に適ぐ。姑鄧痰疾を患い、将に起きず。婦涕泣憂悼す。乳肉の療すべきを言う者有るを聞く。心之を識り、一日薬を煮、香を爇して神に禱る。自ら一乳を割き、地に昏仆し、気已に絶つ（李孝婦、臨武人、名中姑、適江西桂廷鳳。姑鄧患痰疾、将不起。婦涕泣憂悼。聞有言乳肉可療者。心識之、一日煮薬、爇香禱神。自割一乳、昏仆於地、気已絶）。（『明史』巻三〇二、列女伝）

こちらは、病気の姑に妻が己の乳房を切断して薬とするというものである。これらは、「哺育」ではなく、自傷という自己犠牲によって孝の行ないがたさを示した割股の一バージョンということができるが、割く対象が肝や股ではなく乳房であるところが、女性による孝行為であることを強く印象付けるものといえよう。

以上より、本来「慈」を表す「乳房の切断・供与」が、孝を表すモチーフとして用いられる様子が確認できよう。

二―三、孝行譚・慈愛譚に共通して「乳」が現れる理由

ここまで、本来慈愛譚で「慈」を表すモチーフとされる「乳」が、孝行譚において「孝」を表すモチーフとして用いられている様子を見てきた。では、何故このようなことが可能なのであろうか。

まず考え至るのは、老人と子供との同質性である。共に体力・判断力ともに成人に劣る存在であり、ここから

一部礼法上でも同質の取り扱いを受ける。

八十九十を耄と曰う。七年を悼と曰う。悼と耄とは罪有りと雖も、刑を加えず（八十九十曰耄。七年曰悼。悼与耄雖有罪、不加刑焉）。（『礼記』曲礼上）

また、老人と子供とは、生存に他人の庇護を必要とする存在であり、成人から見て扶養の対象である。ゆえに、老人の扶養は赤子の哺育に擬せられる。

本朝の例だが、

徐氏としよりてのち煩ひ、行歩も叶はざりけるを、潘氏よるひるそばを離れず事へぬる体、慈母の赤子をそだつるに異ならず。（中江藤樹『鑑草』）(注13)

と、姑への孝行を「慈母の赤子をそだつるに異ならず」と表現する例が見える。この老人と子供との同質性、さらにそこに基づく扶養の同質性に、「養親」と「養子」とに共通のモチーフが現われる根本的な理由があると考えられよう。

実際的な理由としては、嬰児がそれのみで成長可能なことからも明らかなように、母乳の栄養価が高いことが挙げられる。『五雑俎』に、

穰城に人の二百四十歳なる有り。復た穀を食わず、惟だ曾孫の婦の乳を飲むのみ（穰城有人二百四十歳。不復食穀、惟飲曾孫婦乳）。（『五雑俎』巻五）

とある。穀物を食べずに母乳のみを摂取して二四〇歳まで生きたという話であり、母乳に異常な長寿を叶える力があるという俗信が見える。

またもう一つ、老人に母乳を与える理由として、液体である母乳は歯の抜けた老人にとっても摂取が容易であることが指摘できよう。漢代の張蒼の伝に、

蒼の相を免れて後、老いて口中に歯無く、乳を食う。女子もて乳母と為す（蒼之免相後、老口中無歯、食乳。女子為乳母）。（『史記』巻九六、張丞相伝）(注14)

とあり、老後歯が無くなってからは、乳母を雇いその母乳を飲んだという。

観念的理由として挙げられるのが、下見隆雄氏が明らかにした、娘の父に対する孝と、母の子に対する慈にお

ける同質性である。下見氏は、「母が子を養護支援する関係は、……娘と父の間にもほぼ同様に認められる」として、「娘における父への母性発揮は、子であるが故に、形式的には、孝として把握されるのであるが、また一方、娘が、本来は儒教社会で男性を保護して支える母性を発揮すべき女性なるが故に、その孝実践の根底には、母性的要素が濃厚に浸透していると解釈すべきだと考えられる」(注15)と指摘している。女性の孝心と母性とに同質性が存在する、つまり、娘が父を保護せんとする心情と母が子を保護せんとする心情とに共通の性質が存すると考えれば、娘の孝と母の慈とが同様のモチーフを通して顕現するのは、それほど不思議なことではないであろう。そうして、その孝と慈との二つの場に顕現する母性が、「乳」というモチーフを採ることについても、特に疑問を差し挟む余地はない。

保護・扶養を必要とする存在たる老人に対する女性からの扶養行動は、同様に保護・養育を必要とする存在たる幼児に対する女性からの母性と共通する性質を持つ。ために、実質的にも象徴的にも母子の繋がりを象徴する「乳」が、孝と慈という二つの場での「保護せんとする心情」を象徴するモチーフとして使用可能となるといえよう。

三、男が乳を出す話

前章では、女性の孝が母性と共通の性質を有するが故に、母性の象徴である乳が孝行譚においても用いられることについて確認した。ところが『孝子伝』には、娘や嫁ならぬ男性が乳を出すという、いささか奇妙な話が収録されている。

李善は南陽の家奴なり。李家の人並びに卒(にわか)に死す。唯だ一児の新たに生れたる有り。然れども其の親族、一(ひと)りも遺る有る无し。善乃ち郷隣を歴(へ)、乳を乞いて之に飲ませ哺(やしな)う。児、飲みて恒に足らず。天、其の精を照(あらわ)し、乃ち善の乳をして自ら汁を出ださしめ、常に充足することを得たり(李善者南陽家奴也。李家人並卒死、唯有一児新生。然其親族、无有一遺。善乃歴郷隣、乞乳飲哺之。児飲恒不足。天照其精、乃令善乳自汁出、常得充足)。(陽明本『孝子伝』、李善)(注16)

男の家奴が主家の子に乳を与えるという話であるが、この故事が『孝子伝』に収録されていることから、編者が

この故事の示す内容を「孝行」と認識していたことが分かる。だが、中島和歌子氏が、当該話を「「孝子」が拡大解釈されており」(注17)とするように、この故事はステレオタイプな孝行譚とはいいがたい。一般的な孝行が、親（年長者の血縁）に対する行為であるのに対して、この故事では、行為の対象が年少者の非血縁であり、李善の行為が、孝というよりも、主家に対する忠と感じられるためである。

では、なぜ一見忠がテーマと見えるような話が孝行譚とされているのであろうか。この疑問に関して、『孝子伝注解』当該章の注に、「孝と忠は一体のものと考えられており、李善の主家に対する忠義は、孝の表れとして表彰されるにふさわしい行為であった」(注18)とある。儒教的思惟において忠孝は同源と考えられるため、この話が孝行譚と認識されるのが、所謂「忠孝一致」という観念に基づくとの指摘は、正鵠を射ていると思われる。

だが、単に「忠孝一致」故にこの話が採られたとすれば、他にも一見忠がテーマと見えるような故事が収録されていても不思議ではないと思われるのだが、そういった例は他に見えない。当該話が孝行譚と認識された理由については、「忠孝一致」観念の存在に加え、今一歩進んだ説明が可能であると思われる。

そこで、まず「年少者」の要素に留意して他の孝行譚を閲すると、

朱明は、東都の人なり。兄弟二人なり。父母既に没し、久しからずして遺財各百万を得たり。其の弟驕奢にして、財物を用い尽くして、更に兄に就きて分を求む。兄、恒に之を与う。是くの如きこと一たびに非ず。嫂、便ち忿怨し、小郎を打ち罵る。明、之を聞きて曰わく、汝は他姓の子、我が骨肉を離らむと欲るや。四海の女子は、皆婦と為すべし。若し親を求めむと欲せば、終に得べからずと。即便妻を遺るなり（朱明者、東都人也。兄弟二人。父母既没、不久遺財各得百万。其弟驕奢、用財物尽、更就兄求分。兄恒与之。如是非一。嫂便忿怨、打罵小郎。明聞之曰、汝他姓之子、欲離我骨肉耶。四海女子、皆可為婦。若欲求親者、終不可得。即便遺妻也）。（陽明本『孝子伝』、朱明）(注19)

田真・田慶・田広、兄弟三人、財産を分けんと欲す。堂前に紫荊一株有り、花葉茂盛す。夜に折分して三と為さんと議す。暁に即ち憔悴す。乃ち真泣きて曰く、樹本同根、分たるを聞きて尚お此の如し。

人何ぞ如かざるや、と。兄弟是に由りて復た分れず（田真田慶田広、兄弟三人、欲分財産。堂前有紫荊一株、花葉茂盛。夜議折分為三。暁即憔悴。乃真泣曰、樹本同根、聞分尚如此。人何不如也。兄弟由是不復分焉）。（『孝行録』、田真諭弟）

など、弟との関係即ち兄弟間の親和をテーマとする故事が孝行譚とされていることが分かる。また、

晋の右僕射鄧攸……、其の児及び弟の子綏、度るに両全する能わず。乃ち妻に謂いて曰く、吾が弟早くに亡し、唯だ一息有るのみ。理として絶つべからず。止だ応に自ら我が児を棄つべきのみ。幸いにして存するを得れば、我後に当に子有るべし。妻泣きて之に従い、其の子を棄つ（晋右僕射鄧攸……、其児及弟子綏、度不能両全。乃謂妻曰、吾弟早亡、唯有一息。理不可絶。止応自棄我児耳。幸而得存、我後当有子。妻泣而従之、棄其子）。（『孝行録』、鄧攸棄子）

劉廷譲、大寧武平の人なり。至順の初、北方の兵起ち、民殺掠さる。廷譲家を挈げ山中に避く。幼弟の方に乳する有り、母王氏懐に置く。兵急にして、廷譲乃ち己が子を棄て、一手もて幼弟を抱き、一手もて母を扶し、疾駆して免るを得。事聞こえ、之を旌す（劉廷譲、大寧武平人。至順初、北方兵起、民被殺掠。廷譲挈家避山中。有幼弟方乳、母王氏置于懐。兵急、廷譲乃棄己子、一手抱幼弟、一手扶母、疾駆得免。事聞、旌之）。（『元史』巻一九七、孝友一）

は、実子を見殺しに弟や弟の子を救った話で、

魯国の義士は兄弟二人なり。少くして父を失い、以って後母と居り。……隣人酒に酔いて、其の母を罵り辱しむ。兄弟之を聞き、……遂に往きて之を殺す。……使其の家に到り、問いて曰わく、誰か是れ凶身なりやと。……母曰わく、願わくは小児を殺せと。王曰わく、少き者は人の重ずる所なり。如何ぞ之を殺すやと。母曰わく、小なる者は自妾（みずから）の子なり。大なる者は前母の子なり……（魯国義士兄弟二人。少失父、以与後母居。……隣人酒酔、罵辱其母、兄弟聞之、……遂往殺之。……使到其家、問曰、誰是凶身。……母曰、願殺小児。王曰、少者人之所重。如何殺之。母曰、小者自妾之子。大者前母

之子……)。(陽明本『孝子伝』魯義士)(注20)

魯姑、魯人なり。時に斉寇の之を逐うに値る。姑に二子有り、遂に小者を棄て大者を抱きて走ぐ。斉軍問いて曰く、小を棄て大を抱くは何ぞや、と。姑対えて曰く、大者は是れ夫の前妻の子なり。夫亡するの日、我に保守を嘱す。敢えて其の言を忘れず、と(魯姑、魯人也。時値斉寇逐之。姑有二子、遂棄小者抱大者而走。斉軍問曰、棄小抱大何也。姑対曰、大者是夫前妻之子。夫亡之日、嘱我保守。不敢忘其言也)。(『孝行録』、魯姑抱長)

などは、実子と継子との択一状況に於いて、継子の命を優先した例である。以上、年少者への保護行為で、『孝子伝』『孝行録』「孝友伝」などの載す、即ち孝行譚として取り扱われている事例を挙げた。つまり、家族・宗族内の年少者に対する保護行為は、充分に孝に値するのである。

これは、谷川道雄氏が「自己愛の克服(克己)を通じて共同体の存立原理に反省的回帰を行なうこと(復礼)が「仁」であり、その「仁」の実践者こそが「士」である。したがって、そのもっとも重視する「孝」とは、いうまでもなく単に父母個人に対する奉仕ではない。祖廟を中心として過去より未来まで連綿として存続する家族共同体の一員としての当然の義務なのである」(注21)、木島史雄氏が「孝の称揚は、親子関係の強化をつうじて宗族内の結束を教化する方策であり、「孝」は、個人同志(ママ)の関係についての徳目ではなく、各個人とその宗族との関係についての徳目であった」(注22)、『孝子伝注解』が、「中国における孝は、大家族制度の維持と密接な関連をもつ徳目であり、朱明のように親族を重んじる態度は、孝の趣旨に合致する」(注23)などとするように、孝が大家族制度・宗族の維持のための徳目という一面を有することに起因する。

またこの話が奇妙に感じられるもう一つの原因は、男性が乳を出すという奇跡(注24)だが、この故事を構成する「男性が乳を出して幼児を養う」というモチーフは、他書にもいくつか見ることができる。

孟景休至孝なり。大寒に親を葬り、足指皆な堕つ。弟偉に乳哺する無く、景休親ら之に乳す。日を累ぬるに、乳自ら下り、足指復た生ず(孟景休至孝。大寒葬親、足指皆堕。弟偉無乳哺、景休親乳之。累日、乳自下、足指復生)。(『孝行録』、景休乳弟)

徳秀親在りて娶るに及ばず、婚を肯んぜず。人以て嗣を絶つべからずと為す。答えて曰く、兄に子あり、先人祀を得。吾何ぞ娶るを為さん、と。初め兄の子襁褓にして親を喪い、資の乳媼を得る無し。徳秀自ら之に乳す。数日して湩流れ、能く食いて乃ち止む（徳秀不及親在而娶、不肯婚。人以為不可絶嗣。答曰、兄有子、先人得祀。吾何娶為。初兄子襁褓喪親、無資得乳媼。徳秀自乳之。数日湩流、能食乃止）。（『唐書』巻一九四、卓行伝）

孟景休は、男性でありながら自ら弟に乳を与える。元徳秀もまた男性でありながら、兄の子のために自ら乳を与える。これらはどちらも、血縁の年少者のために男性が乳を出すというモチーフである。先にみたように、年少の血縁者に対する保護・奉仕行為は孝の要件を満たすから、これらの故事は孝行を表したものと認識され、『孝行録』などに収録されているのであろう。

ここで挙げた「男性による授乳」譚と李善の故事との差異は、保護対象が「血縁」かどうかであるから、そこがクリアされれば李善の故事を孝行譚と見なすのに不都合はない。当該話において、この「血縁の子」と「主家の子」との置きかえを可能としているものこそ、「忠孝一致」観念であると考えられよう。

畢竟するに、李善の故事が孝行譚と認識されるのは、忠孝の同質性より忠義譚が孝行譚に包含されることに加え、その同質性の上で、「男性が乳を出す」型の孝行譚のヴァリアントとみなすことが可能であるためといえよう。

おわりに

ここまで、「乳」（「乳房」「母乳」）モチーフが登場する孝行譚について考察した。これら「乳」モチーフは、母性や母の恩を象徴するため、「母―子」間の情愛をテーマとする慈愛譚で用いられるのが自然だといえるが、時に「実親―娘」「舅姑―嫁」間の孝行譚においても用いられる。

その用いられ方は、「年老いた親を母乳で扶養する」「乳房を切り取って与える」といったものだが、これらは慈愛譚に見えるモチーフと同型といえる。母子間の結合を象徴する「乳」が女性の孝行譚でも用いられる、つまり慈愛譚のモチーフが女性による孝行譚でも使用可能であるのは、老親と子供と、また、女子から親への孝心と母から子への母性とが有する共通性のためであると考

えられる。

また、『孝子伝』には、「男の家奴が主家の子に乳を与える」という故事が収録されるが、一見忠義譚と見える当該話が、孝行譚集である『孝子伝』に収録されるのは、「忠孝一致」観念が、主家への献身を孝行と見なすことを可能にしていることに加えて、李善の行動内容に類する、家族・宗族内の年少者に対する保護行為、特に男性による授乳という奇跡が孝行と認識されるためと考えられよう。

注

(1) 真賢撰「科註父母恩重経罔極鈔」(日本大蔵経編纂会編『日本大蔵経』第三四巻、日本大蔵経編纂会、一九一八年)、五二一頁。本朝でも、行基の「百さかややそさかそへて給てしちぶさのむくひけふぞ我する」(新日本古典文学大系40『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』、岩波書店、一九九三年、三〇頁)など親の恩を「乳房」を用いて表現する例がある。

(2)『宋書』巻七六・『南史』巻一六にも同記事を載す。

(3)『乾隆大蔵経(龍蔵)』第八二巻、二〇〇三年、五七〇―五七一頁。また『大正新脩大蔵経』第五三巻(事彙部上)、大正新脩大蔵経刊行会、一九九〇年、三三頁。本朝では、『今昔物語集』巻二・『三国伝記』巻二などの説話の他、お伽草子『釈迦の本地』・説経『しやかの御本地』・浄瑠璃『釈迦如来誕生会』などとして受容されている。

(4) 元もとインド種の説話で、『雑宝蔵経』巻第一、『経律異相』巻四五など類話が多い。本朝では『今昔物語集』巻五第六に見える。

(5) 稲田浩二・小澤俊夫責任編集『日本昔話通観 研究篇1 日本昔話とモンゴロイド』、同朋舎出版、一九九三年、四四八頁。

(6) 横山重編『説経正本集』第二巻、角川書店、一九七八年。

(7)『説経正本集』第二巻、二九二頁。

(8) マリリン・ヤーロム著・平石律子訳『乳房論―乳房をめぐる欲望の社会史―』、株式会社トレヴィル、一九九八年、三三―三四頁。

(9) ヤーロム氏前掲書、三三頁。

(10) 菅野則子校訂『官刻孝義録』下巻、東京堂出版、一九九九年、四八〇頁。

(11) 金文京氏はこのモチーフの発生について、「「断乳」、現代語の「断奶」は、いわゆる乳ばなれのことであるが、右の明達の妻の話は、この「断乳」を曲解した上に生まれたのではないであろうか」(「『孝行録』と「二十四孝」再論」、『芸文研究』六五、一九九四年)とする。

(12) 本朝のお伽草子「熊野の御本地のさうし」・説経「熊野之御

本地」「ごすいでん」などに見られる「母の死体の乳房から母乳が出て子を養う」というモチーフは、この「母体から独立する乳房」に繋がる発想であろう。

(13) 武笠三校『中江藤樹文集』、有朋堂書店、一九二六、二〇五頁。なお、当該話の原拠「林婦三孝相承子孫世貴」(『廸吉録』巻之八)にはこれに類する記述は見えない。

(14)『漢書』巻四二、張蒼伝にもほぼ同じ文章があり、顔師古の注に「言毎就飲之」とある。

(15) 下見隆雄『儒教社会と母性―母性の威力の観点でみる漢魏晋中国女性史―』、研文出版、一九九四年、三七九頁。

(16) 幼学の会編『孝子伝注解』、汲古書院、二〇〇三年、二三八頁。

(17)「『孝子伝』輪読会ノート(後漢・李善)」、『国語国文学科研究論文集』第四四集、一九九九年。

(18)『孝子伝注解』、二四〇頁。

(19)『孝子伝注解』、八六頁。

(20)『孝子伝注解』、一七一―一七二頁。

(21) 谷川道雄『中国中世の探究』、日本エディタースクール出版部、一九八七年、一三八頁。

(22) 木島史雄「六朝前期の孝と喪服―礼学の目的・機能・手法―」(小南一郎編『中国古代礼制研究』、京都大学人文科学研究所、一九九五年)、四二四頁。

(23)『孝子伝注解』、八八頁。

(24) 男性・未孕女性・老女など本来授乳能力のない者が母乳を出すのは典型的な奇跡の一つ。匈奴に捉えられた蘇武の帰還を許す条件(「羝乳乃得帰」(『漢書』巻五四、蘇建伝))とされるなど、絶対に有りえないことの例とされる。また、『和漢三才図会』第一二巻「乳」には、未孕の家婢が親のない子を育てる際、奇跡が起こり乳が出たという話を載す。

【附記】 本稿は口頭発表「孝行譚における「乳」」(「東アジア漢学者の会第九回研究発表会」、於南榮科技大學、二〇一三年一〇月五日)に加筆修正を加えたものである。